PROJECT

細部に宿る神々の闘争

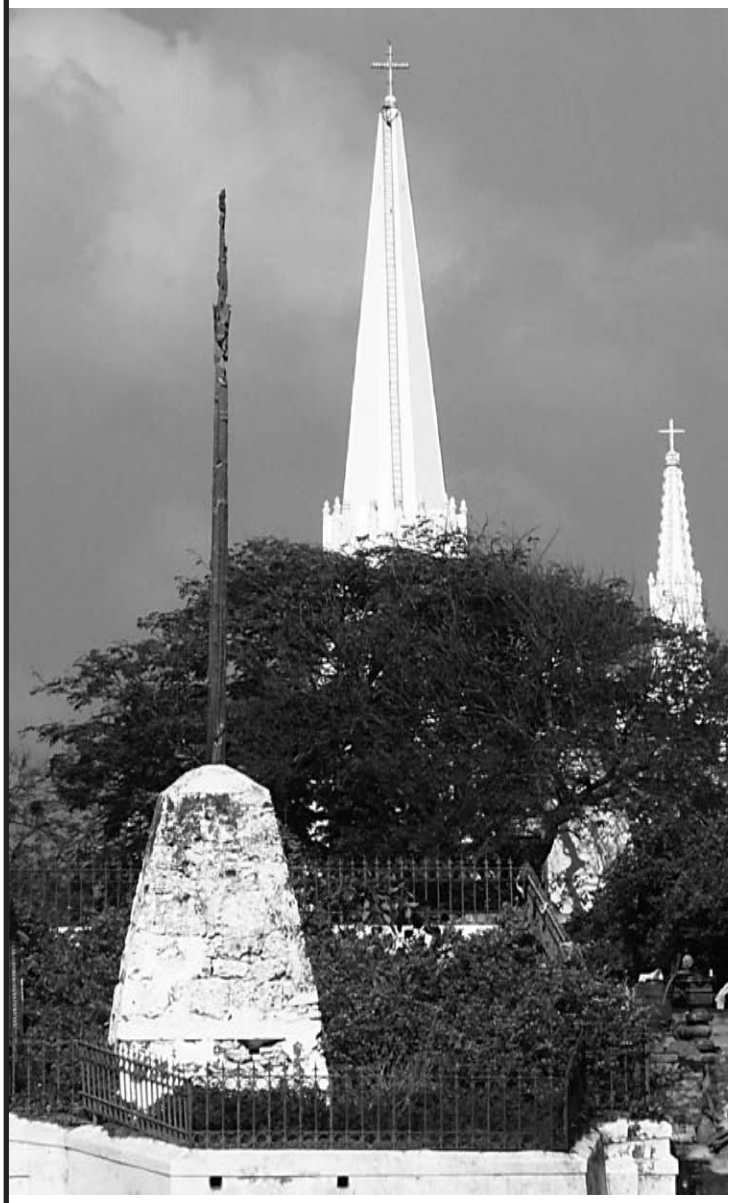
文・写真
杉本良男

共同研究 ● キリスト教文明とナショナリズム──人類学的研究（2007-2010）

人類学が近代キリスト教ミッションの出来の悪い鬼っ子であることについては、すでに輓近の『民博通信』127号（2009年12月）でも述べた事柄である。悠久2千年の歴史を持つキリスト教についてこの1年で大きく状況が変わるわけもないが、一方人類学が主たる研究対象とする現地社会は刻々とその様相を異にしている。共同研究「キリスト教文明とナショナリズム」（代表・杉本良男）に関して、その総論については拙稿にゆずるとして、インド洋津波災害をキリスト教、ナショナリズムと関連づけて述べ、責めをふさぐことにする。

インド洋大津波

スマトラ沖大地震に端を発した大津波は2004年12月26日朝にインド洋沿岸部一帯を襲った。地震津波発生地のインドネシアでは20有余万の死者を出したが、タイ、インド、スリランカなどでも万単位の犠牲者を出している。インドでは公式に死者1,2405人、損害額は日本円にして2,000億円以上と推定されている。ただし、この日はクリスマスの翌日のイギリスでいうボクシング・デーにあたり、多くの巡礼者がキリスト教の聖地に集まっていた。そのため死者の同定がほとんど困難なままに埋葬されてしまった人びとが多く、正確な犠牲者数をはかることはおよそ不可能であった。



聖トマスの奇蹟のポール（手前）、奥は大聖堂（2007年マドラス）。

共同研究「キリスト教文明とナショナリズム」の主題との関連でいえば、インドにおける被災地が当然ながら沿岸部であったことと、地震津波発生がクリスマスの翌日だったことが、大きな意味を持っている。インドは一般にヒンドゥー教が卓越していることで知られるが、イスラームが依然13パーセントほどあり、キリスト教、シク教、仏教などもある。キリスト教徒は比率でいうと2.4パーセント足らずであるが、実数にすれば2,400万人ほどいることになる。多くはカトリックであるが、プロテスタント諸派も東北辺境地域などに分布している。被害にあった海岸部の漁民には、このインドでは少数派のキリスト教徒がふくまれている。また、クリスマスの翌日であったことがさまざまな「奇蹟譚」をうみ、それがさらに政治的にも利用された。ここにナショナリズムが深く介在することになる。

聖トマス伝説

津波被害を受けた南インドのタミルナードゥ州と一部被害を受けたケーララ州は2州あわせると、インドのキリスト教人口全体の4割を占めている。それだけでなく、南インドからスリランカにかけて広く信じられている聖トマスの布教譚、殉教譚がいまも生きている地域である。タミルナードゥ州の州都マドラス（チェンナイ）は大きな被害を受けたが、とくにサントメとよばれる地域で漁民への被害が大きかった。この地域の名称は、十二使徒の1人聖トマスの遺骨を祀るサントメ大聖堂を戴いていることに因んでいる。聖トマスは西方キリスト教会ではそれほど大きな存在ではないが、東方キリスト教会とくにシリア系教会にとってはきわめて重要な意義がある。

南インドからスリランカに流布しているのは、聖トマスが南インドにやってきてキリスト教を布教したという開教伝説である。その年号まで特定されていて、紀元52年にインドにやってきて72年に殺害されたと信じられている。インドでの布教は現在のケーララ州とタミルナードゥ州で行われたとされるが、もちろんその真偽は不明である。そうはいっても、人類学的に重要なのは、この伝説が現在も信じられていること、そしてこの伝説に基づいて聖トマスにちなむ聖地が多くの巡礼者を集めていることである。

マドラスには聖トマス関連で、聖トマス・マウント（聖トマ

マドラスからウェーラーンガンニを目指す巡礼（2009年マドラス）。

ス殉教の地）、リトル・マウント（聖トマス隠棲の地）、サントメ大聖堂などの聖地がある。津波のさいには海岸に近いサントメ大聖堂周辺の漁民が大きな被害を受けた。その一方で、聖堂そのものは被害を免れている。このことが、宗教ナショナリズムにとっては2つの相反する言説を生む。一方では聖堂が助かったことを聖トマスの奇蹟だとする見方があり、他方で周囲の漁民が被災したことを聖トマスが奇蹟を起こせなかったからだと逆に非難する反キリスト教的立場がある。

ここで、聖堂が助かったのは聖トマスのポールが波を止めたからだということになっている。聖堂の敷地の海岸寄りに日本でいえば国旗掲揚塔のようなポールが立っている。もともとそのいわれはあまり知られていなかったが、津波を契機に一躍クローズアップされた。冷静にみると、海岸側の道路をはさんで、内陸寄りに聖堂があり、ポールの部分から一段高くなっているので、地形的に聖堂に水がはいりにくくなっていることがわかる。しかし、このような冷静な判断を超えるところが信仰の力である。その意味では、この奇蹟のポールは人類学的に非常に興味深い事例である。

癒しの聖母マリア

一方、マドラスから海岸沿いに約300キロメートル南に下がったところにウェーラーンガンニ聖堂がある。正式には「癒しの聖母マリア聖堂」というが、一般には地名のウェーラーンガンニの名で知られる。インドでも有数のキリスト教の聖地で、ふだんからにぎわっているが、とくに毎年8月末から9月初めにかけての大祭には全国からのべ数百万の人びとが集まってくる。巡礼者には交通機関を利用する者もあるが、足で歩いてやってくる方がご利益があると考えられている。8月半ば頃から数百キロメートルはなれた遠隔の地から聖地を目指す巡礼の姿を見ることができる。足の不自由な人がなおったとされる奇蹟譚もあることから、車椅子に人をのせて何百キロメートルもの道のりをやってくる人もある。

この地では、聖堂の北側を流れる川沿いに津波が逆流し、さらに聖堂を避けるかたちで町に流れ込んだ。そのため、聖堂の周囲では被害が大きかったが、聖堂そのものはほとんど無事であった。また、クリスマスのミサを終えて聖堂にとどまっていた人びとは命をとりとめたのである。このこともまた、人びとのあいだに相反するバージョンの噂話が流れる結果となった。それは、聖母マリアが災害から人びとを救ったと見る立場と救えなかったとする立場とのちがいからきている。さらに災害復興の過程で、インドのいわゆるコミュナル対立と呼ばれる宗教間対立が表面化する場面もあった。

ウェーラーンガンニ聖堂がインド第一級の聖地になったのは、1953年にこの聖堂が新しく独立したタンジャーウール教区の管轄下に入ったあたりからである。それ以前の19世紀末ごろも一定の人気を得ていたようであるが、1950年代以降さまざまなメディア戦略によって全国区の人気を博すようになった。管轄の変更の翌1954年は世界的に「マリア年」が祝われたが、ウェーラーンガンニはこの波にも積極的に乗り、巡礼者を増やしていった。2004年津波災害のあと、巡礼産業はいったん大きな打撃を受けたが、メディアを巻き込んだ復興戦略が功を奏し、現在巡礼者、観光客の数は津波以前の水準をはるかにこしている。

こうしたメディア戦略はネット時代にあってますます重要になってきているが、その一方で、インドのヒンドゥー・ナショナリストは強固なグローバル・ネットワークをもつキリスト教に警戒感を隠せなかった。そのため、災害援助のために各地をまわっているキリスト教関連団体に対して暴力をふるうというような出来事もあった。援助を隠れ蓑にして、信者を増やそうとしていると邪推した末の所行ではあったが、そこにはヒンドゥー・ナショナリストの側の危機感の強さが垣間みえる。一方スリランカでは災害復興をめぐってさまざまな対立が表面化したともいわれている。

共同研究「キリスト教文明とナショナリズム」がめざしているのは、このような細部に宿る神々の闘争について大いに論ずることである。

復興住宅のコミュニティホール（2007年ナーガパッティナム）。

すぎもと よしお

民族社会研究部教授。専門は社会人類学・南アジア研究。著書に『インド映画への招待状』（青弓社 2002年）、編著に『アジア読本 スリランカ』（河出書房新社 1998年）、『宗教と文明化（二〇世紀における諸民族分化の伝統と変容7）』（ドメス出版 2002年）、『キリスト教と文明化の人類学的研究』（『国立民族学博物館調査報告』62 2006年）など。